第４回大田市学校のあり方に関する計画等検討委員会 会議録

日　時	令和６年１月２９日（月）　１４：００ ～ １６：０６		
場　所	大田市役所　４階大講堂		
出席者	委　員：１３名／１７名 （欠席委員：岩倉善光委員、森山晃世委員、三島裕貴委員、中尾祥子委員） 事務局：武田教育長、森教育部長、縄総務課長、 清水学校施設係長、清水学校再編係副主任 川津学校教育課長、俵学校教育課主査 山根学事・魅力化推進室長、矢田山村留学センター長		
傍聴人	２４名	報道機関	３社
次　第	別紙のとおり		
概　要	以下のとおり		
附　記	本委員会は原則公開		

１．開会（進行：縄課長）

・委員の半数以上の出席（４名欠席）を確認後、本委員会の成立を報告

（検討委員会設置要綱第６条第２項による）

２．加藤委員長挨拶

新年に入って最初の検討委員会である。本年は、能登半島を中心とした震度７の大きな地震があり、大変大きな被害が出た。また、羽田空港でも大きな事故があり、お正月で帰省されていた方々の移動に大きな影響が出た。お見舞いを申し上げる。新年早々、災害等のニュースが続いているが、本年がみなさまにとって健やかな一年になることを願っている。

３．第３回会議の議事録の確認（進行：加藤委員長）

指摘なし

４．議事

（１）大田小学校について（説明：縄課長）

議事に係る質疑応答

発言者	内　　容
委員長	特段意見がないようなので、大田小学校について実施計画に記載することを検討委員会として了承してよろしいか。
委員	（はい）
委員長	それでは、この場で了承したとする。

（２）全体スケジュールの見直しについて（説明：縄課長）

議事に係る質疑応答

発言者	内容
委員長	当初の予定では、当委員会において、本年３月には実施計画の見直し案を作成することとしていた。そのための議論のたたき台として、教育委員会から三つの素案が示され、委員の皆様にご議論いただいてきたところだが、内容が多岐にわたっており、大田市の子どもたちの未来に関わる内容であるため、時間もかかっている。 今年度内に、あと２回の委員会開催を予定しているが、一旦は事務局から示されたスケジュール案で進めていくこととし、進捗状況により改めてスケジュールを議論させて

	いただくこととしてよろしいか。
委員	（はい）

５．意見交換

（１）再編後の学校の特色づくりについて（説明：縄課長）

・多様な学びの選択肢について

・素案ごとの学校の特色について

（２）三瓶地区の学校のあり方について（説明：縄課長）

意見交換に係る質疑応答

発言者	内容
委員	資料４に書かれている素案ごとの学校の特色について、私はもっとこのあたりが丁寧に説明されると思っていたが、細かい説明がなかったので何を話していいのかと思った。 この学校の特色というのは、統合した後記載されているような学校づくりをしていくことを案としてまとめてあるという理解でいいか。
縄課長	説明が不十分で申し訳ない。昨年９月末、皆様にお示しをさせていただいた三つの再編素案それぞれに対して、このような学校にしていきたいという教育委員会としての考えを記載させていただいた。 例えば、素案１の大田小学校・川合小学校・久屋小学校で言うと、市内の小学校で最大の規模の学校になるため、グループ学習、或いは習熟度別学習、専科教員による指導など、多様な学習指導形態がとれる学校を目指していきたいと教育委員会として考えるということ。こうしたものを再編素案ごとに、それぞれの学校でこういうことができたらと思うことを教育委員会の考えとして示した。
委員	長久小学校の部分に『長久小は現在外国にルーツのある児童が多く在籍しており』という記載がある。現在、長久小学校に在籍している外国にルーツのある子どもは２人。外国にルーツを持つ子どもが多く在籍する学校は他にある。長久小学校は外国にルーツのある子どもが将来的にもっと増えることを見越してこのように位置づけされているのだと思うが、現状は久手小学校の方が多い。第一中学校は６人いる。これは在住外国人共生市民の会で調べている数字である。 その後の部分に『外国語教育により力を入れ』と記載がある。これには驚いた。現在大田市が多文化共生推進計画の第２期計画を策定中であるが、計画には外国語教育を進めるということは一言も書いていない。国際教育、多文化教育を進めるということは書いてある。どういう意味かと言うと、外国語教育というのは英語や中国語、韓国語を指す。外国にルーツを持った子どもたちからすると、日本語は第２言語になる。 外国語を入れるのではなく、第２言語となる日本語をしっかり身につけ、その上でその子が持っている日本文化とは異なる文化と、日本の子どもたちが持っている日本文化の違いをお互い認めあう仲になっていく。それが国際教育、多文化教育になる。そういうことを書いてあるといい。外国語教育を進めるということはおかしいと思う。 また、大森小学校・高山小学校、温泉津小学校のところに、ユネスコスクールについての記載がある。ユネスコスクールに登録すると、国内外の登録している学校同士で交流をするという取り組みが進められている。世界遺産のエリアに入っているからユネスコスクールを持ってこられたと思うが、まず大事なのは、現在自分たちの生活している学校の中に外国にルーツを持つ児童・生徒がいる。その子どもたちの存在を置いておいて、外国のユネスコスクールと交流するということを私は否定しないが、まず大田に住んでいる外国にルーツのある児童・生徒と多文化教育をすることが大事ではないか。残念ながら大田市はそれができていない。過去には、ある中学校に外国にルーツを持つ生

	徒が１０数人いたが、その生徒たちはお互いが同じ国のルーツを持つということで繋がりあうことはなかった。そして日本の子どもたちと一緒に自国の文化や言語を学びあう光景も見られなかった。同じ地域に住んでいて、互いに違うところを認め合い繋がっていきながら、国際的な或いは多文化的な視野を広げていくことがまず大事である。 この資料を読むだけでは、ユネスコスクールをやったら良いという安易な考えではないかと思った。課題としては、もっと様々な実践を踏まえた形でイメージを豊かに膨らませていかないと特色にはならないのではないか。
武田教育長	ご指摘は本当に全くその通りだと思った。私たちの認識の浅さ、理解の浅さを痛感している。先程の外国語教育について、言語としての教育だけではない、もっとより深いものがあるということ。それから現にそのような学びが出来る子どもたちがここにいるということを突きつけられたように思う。ここに挙げたのは、私たち認識不足の者が、こういうことができるのではないかという意味で挙げているので、皆様からのご指摘をいただきながら、肉付けをしていければと思っている。 また、ユネスコスクールについては、これはある意味多文化共生教育とともに、世界遺産がありユネスコの理念を掲げている大田市でこそ、こういう部分で海外と繋がり、もっと広い世界に子どもたちを出会わせてやりたい。そういうことが出来ているのかという問いの中から、ここに書かせていただいたものであるので、ただ単にこれを記載すれば特色になるという安易な気持ちで書いたわけではない。私は常々大田の子どもたちがもっと世界を知り、その時代に合ったいろんな力をつけていってほしいと思っている。学校でそれぞれ国際教育や国際交流に取り組まれているが、もう一歩進めていくための一つの策として、ユネスコスクールのシステムの中に入っていくような学校が大田市に一校でも作れたら、それは大きな前進になるのではないかと考えた。 至らない点をご指摘いただいたと思い大変恥ずかしく思っている。ありがとうございました。
委員長	子どもの実態に合わせた共生や多文化、それはかなり難しい課題ではあるが、どういうふうに実現していくかということ。具体的なビジョンや対策を検討して、学校の特色として取り込んでいけたらと思う。
委員	資料３について質問させていただきたい。先程の説明から、学校再編後のいろんな選択肢の考え方としてここにまとめられたものだと思っているが、この資料の中に校区をある程度自由に選べる“学校選択制”と、“校区外就学の許可基準の緩和”とある。あくまでも学校再編後にこういった考え方があるというところだが、“校区外就学の許可基準の緩和”の部分に『規模の大きい大田小学校及び第一中学校の校区から基準を緩和』と記載があり、ここは比較的近い話なのだろうと思っている。 現在、校区外就学の児童・生徒は保護者の責任において登下校することになっている。ただ、安心安全に登校してほしいのが一番の願いなので、校区外就学が増えるようになっていくのであれば、校区外就学の子どもたちの登下校について検討していただきたいと思う。学校選択制になるとそのあたりがもっとはっきりしてくると思うが、基準の緩和というのはすぐ現実になるようなことだと思うので、安心安全な登下校ができるように検討していただきたい。
委員	再編後どのような特徴を出すかということを整理されていると思うが、私が思うのはこういうことではなく、これから大田で育つ子どもたちが将来どのような能力や知識、技術や考え方を持ち、また、先程の発言にあったように国際的な中で、様々なことを学び、働きをしていってほしいと思うが、そのために小学校・中学校・高校・大学と進んでいったときに、どんな能力やスキルを持って社会の中で活躍できる人材を作りたいか

	というビジョンである。そこが見えてこない。 　学習指導要領など文科省が出しているものは最低限の基準だと思っている。現在大学や社会に求められているのは、国際的に活躍する人材であることや、人材が不足しているデータサイエンスやＡＩ部門の人材を育てるということで、国もそういう方向でやっている。実際は残念ながらそういう人材が非常に少ないのが日本の現状になっている。本来小学校・中学校・高校の中でそういったものを育む、或いはそれによって起業家精神を持ったような子どもを育てて世界で活躍していくことが必要。 　今まで海外に行くと、よく海外の方から言われていたのは『あなたのアイデンティティは何ですか』ということ。あなたはどのような環境で生まれ育って、どのような教育を受けて、どのような人なのだと言われた時に、日本人は自信を持って語れないのが現状ではないか。なので、例えば大田で言うと『田舎で何もない』という答えが出る。私もそうであった。昔は、島根は何もないと思っていたが、現在は他にはない良いものがたくさんあることを自信持って言える。私は自分が通っていた小・中学校が複式学級であったが、それは非常に恥ずかしいわけでもなく、この委員会においては、それで私が座っていると思っている。逆に言うと、国際的な人材にするためには、自信を持って自分たちの学びを語れるような教育が必要。そのために、多文化を理解して、それを理解できる言語や読む力を身に着ける。読む力というのは国語力だけではなく、全てだと思っている。英語もそうだし、数学もそう。世界共通言語が数学というのは、現象を理解すること。これは誰もが理解できるものだと思う。それを理解できると、コンピュータに論理を乗せることができる。読む力や書く力というのは全ての技術に繋がっていくので、私はぜひ大田の教育の現状、或いは子どもたちの現状を分析していただき、学力の三要素と言われるものや、社会で働くために必要なスキルを、子どもたちの教育の中に落とし込んでいかないと未来ある教育にはならない。これは、これから２０年先、或いは５０年先に求められる能力と思われるものを、今描いて、それを育てていかないといけない。そのために統合や多様な教育ができるような枠組みを作っていくのだと私は思っている。 　今日の議論にあるように、その学校の枠組みの今まで通りを変えていかないといけないということがある。そして実際に通うようになると、先程発言があった安全性や通学に関する整備が必要。ただそのあたりがあまり見えなくて、小手先の外国語教育などのような言葉になってしまったのだと思う。 　大田以外から『ここに来て学びたい』と思うような、そういったビジョンやストーリーを作っていくのがこの委員会。例えば資料４であれば、全体のストーリーの中で、大田小学校・川合小学校・久屋小学校はどういう位置づけの学校であるとか、大森や三瓶は、どういう位置づけの学校であるという色が出せるのではないかと思う。事務局がどのように考えておられるのかお聞きしたい。
森部長	まず学校選択制については、再編素案を考える中でこのような選択は検討していかなければならないと思ってここでお示ししたもの。 　校区外就学については、具体的に出しているため、課長も申したように来年度から基準緩和を考えている。ただ、基本的には保護者の責任において通学をしていただくということになるので、目の前だけのことで言うと保護者に対してしっかり説明することが必要になる。これは市内の学校すべてに当てはまることであるので、校区外就学の方も含めた安全安心ということは、学校運営協議会などの中でお話をいただくようなことになると思っている。ここのところが一番大事だと思っているが、この場ではそういう答えしかできないと思っている。ただ、それでとどまるというわけではなくて、事務局内

	でこの部分については踏み込んで考えていきたい。 　それから学習要領指導要領の中のことは最低限ということであるが、この最低限という位置がどこにあるのかを私も考えている。市内での教育環境をどのようにすればいいのかと考えたとき、先程の発言はまさにその通りだとは思う。はたして現在の環境の中で、少人数の学校の子どもたちが将来に向かって成長していくために必要な環境であるのか、それが今の学習指導要領に沿ったことになっているのかということをもっと議論をして、そのベースの上で本当はこういうことを考えていければいいと思っている。 　先程スケジュールを延長させてもらいたいと説明したが、それは議論が白熱していることもあるが、実は今年度の出生数が１５０人台ということがある。当初この場で説明したときは、１７５人の出生数の中でこれからの大田市内の学校のあり方をどう検討していくかを皆さんで考えていきたいと話していたが、それが１５０人台ということは、この数年間で１割強が減っているという状況にある。来年がどうなるかというのはまだわからないが、そういう状況にある中で、子どもたちがどういう環境で教育を受けたらいいのかということが一番問われていると思う。ここのところはジレンマがあり、大屋委員の発言にあったことは我々としてもどんどんやっていきたいという思いもあるが、まずは数の論ではないとは言われても、この出生数なのにこのままでいいのかとは思っている。 　配布した大田市の人口データの推移を見ていただきたい。これは住民基本台帳情報なので、届出のタイミングもあるが、前年同期の出生数は１６９人であった。その上に記載されているのが令和５年の出生数である。１５９人という数字が出ている。これは暦年で集計したものなので、年度で見たとき１５０人台になるという見込みである。 　そういうところも含めて、まず基礎をしっかりしていくということが求められていると思う。最低限と発言のあった部分がどこまでの位置で、そこからどうやって上乗せしていくかということになるが、やはり学習指導要領の中の力をつけさせることをどこまで出来るかということを議論してからになると思っている。
委員	事務局からの発言はまさにそうだと思っている。どちらかというと、人数が少なくなって、学習指導要領は最低限だがそれがうまくいかず、そこに到達できない現状を明らかにすると、それを設備や施設で解決できる可能性があるのか。現状の数を見ると、どう考えても統合だけでは解決できないと思う。 　そうすると今の時代、インターネットがあれば繋がることができるので、グループ学習でコミュニケーションをとるのは人数がいないと難しいが、新しい技術使えば、移動しなくても繋がることできる。それがユネスコスクールでは世界と繋がる。世界だけではなくて、市内でも繋がることができる。そう考えると、この状況で各学校が最低限やろうと思ってもうまくいかない部分を分析していただき、それをどういうふうに解決するかを考える。現状は施設・設備でどうにかしていくだけでは十分ではないので、ある程度の統合によって学べる環境を作っていくなど、前向きな方向で示していただくと、なぜ統合しないといけないのかという疑問は解決するのではないか。 　資料にある“必要な能力”を育むために、文章だけではなく、現状は十分なのか分析した数値やグラフで見える化がされると皆さんわかりやすいのではないか。 　それを補うために、大田としてどんな特色のある教育や連携をしていくかを考えていくと、一体としてやっているように見えると思うがいかがか。
武田教育長	いろんな説明会に行くと、どういう子どもを育てるのか、どこを狙っているのか、そういう質問も多い。私たちは現状分析して、国際社会で生きていくために必要なスキルを小学校から中学校・高校まで発達段階に合わせて整理していくと、より明確になって

	いくと思った。 　ただ、部長が現実的な話について発言したように、それを作り上げるのには少し時間が必要だが、教育委員会の中だけでなく学校現場にも参画してもらいながら作っていかないといけないのではないかと考える。そうなると作成までに少し時間がかかると思っている。 　また、１０年２０年先を見通してと言いながら、見通せる力が私も含めて大人にあるかということもある。そういう意味ではここで議論をして何校かに絞っても、それは今後その都度変化していくのではないか。そのため、決めきれない部分ももしかしたらあるかもしれない。以前発言したように、これまでの学校教育は、大田市教育委員会が基本構想を示し、あとの具体な部分は各校の学校長におまかせしていた。しかし再編に取り組む中で、今後は今まで以上に大田市教育委員会がリーダーシップをとりながら、大田市にどういう教育を構築していくかを明確に示し、与えられた使命を果たしていくという方向に転換していかなければならないと思った次第である。 　したがって、先程の発言は非常に意義あることというのは十分分かるが、現実的な時間の問題や、社会変化が大きい中でそれだけを先にというのはどうなのだろうか、一緒にやっていく苦しさがある。
委員	非常によくわかる。ただ、学校再編を行って施設を新しく作るなどする方が私は時間がかかると思う。私が言った、何を学び、どんなことを教え、どういう教育をするかというのはソフトの部分なので、それを教育委員会として示して進めていく。それに合わせて、ハードの面を整備して、より良い教育環境にしていくことができるのではないか。それは予算も調整期間も必要で、今の計画でも１０年でこれが完成するかどうかだと思う。 　そうすると先程の発言にあるように、子どもの数がもっと変化して、ハードの面は変わっていく可能性がある。しかし、ソフトの面での教えるべきものや、何を学ばせてどういう子どもを育てるか、これはその都度の変化に十分対応できる。今はそれを考えないといけない時期ではないかと思う。 　全体を見たとき、最初に言った大田市教育の計画的なところが１０年前、２０年前に書かれているものがそのまま残っている。ここの変化がないのに、統合を先に行うのは確かに子どもの数が少ないから。だが、そこで何をしたいのかというのが見えてこないと、住民の皆さんや子育てをされている皆さんから理解得られないのではないか思う。どちらが先かというのは難しいことだが、統合の話も進めながらも、やはりビジョンやストーリー、その次に具体的に実現していくための予算、そして他の部署と連携して、大田市全体の財政を考えて、どのように実現させるかというところに移っていく。 　今までは教育委員会だけ、或いは学校だけというところから、私はもっと大田市全体として限られた予算の中でどういうふうに教育を行い、経済を回し、住民が協力して大田に住むと良かったというところに持っていくかというのが大事になると思う。 　まだまだ答えはないので、ぜひ検討していただきたい。資料としても見える化をしていただきたい。見えるのは数字としての人口推移や予測しかないので、そうではなくて、もっとこの中で、いろんなものを結んでストーリーやビジョンを描いていただく方が皆さんにもわかりやすいと思う。
委員	委員や教育長の発言はそれぞれもっともであり、今一度、この会で何を諮っているのかを全員で意識してもらいたい。教育長は当初から新しい大田の教育のあり方を考えていきたいという発言をされていた。そのためのビジョンについては、委員も当初から一貫して発言されている。第２回からだと思うが、人口が減り子どもの数も減っていくと

	いうこのピンチをチャンスに変える、そういう発想をしていきたいと発言があり、これが本当に本質をついていると思う。また、選ばれるような大田の教育でなければならないという発言もありそのとおりだと思う。 １月６日山陰中央新報の記事の中で、『未来像の明確化を』ということが取り上げている。この議論の中で『統合パターンが示されているが、主役である子どもにどのような教育を提供するかの中身が見えない。委員からは、教育の未来図を明確化するよう指摘する声があがった』とある。 １２月１３日には、１１月の市民説明会に追加する形で意見交換会が行われており、これもご苦労されていると思う。こちらの意見を読んできたが、やはり何を目指していくのかという未来像みたいなものの輪郭がもう少し見えると、参加者の皆さんの意見も変わってくるのかなという気がしている。それから前回の会議で、大田小学校の建て替えの話があったが、まちなかの学校が建ててしまってからビジョンにそぐわなかったということでは済まされないと思うので、同時並行で考えていかないといけない。ぜひもう少し未来像やビジョンといったものが文章でも示され、それに対し市民の方から意見をいただくような流れがあってもいいのではないかと思う。
武田教育長	数名の委員から同じような意見をいただいているので、事務局の方で検討させていただきたい。その意義は重々わかっているので、その上で見える化をしていきたい。
委員長	大田市教育ビジョン基本構想が出たのが平成２８年だったと聞いている。それに基づいて方針が作られて、実施計画が立てられる。そういう手順をここ１０年の間踏んできておられるので、おそらく基本はそこに立ち返って、この再編統合へ向けての市として、教育委員会としての考え方を出してもらえると、今までの流れの中に位置付いた再編統合の検討になると思う。 先程から学力の三要素の話が出ていたが、学校教育法第３０条で規定されているのでずいぶん前に出たものであるが、これは学習指導要領で言えば、基礎になることかもしれない。日本の将来を担う子どもたちが身に着けていかないといけない学力の三要素は学校教育法の方で定められているので、こういったものを具体化していく作業を平行しながら続けてやってもらうわないといけないと思う。 委員の皆さんから非常に貴重な意見が出ているので、事務局も検討いただきたい。
委員	資料３の多様な学びの選択肢の部分だが、不登校特例校というのが説明にある。今の学校の中でとても大切なことが、不登校傾向または不登校の児童・生徒にどう対応するかということだと思っている。それはもちろん学校もだが、子どもや保護者もそうだと思う。そして説明の中で、そういうような特例校を指定するようなことのように受け止められたが、そうではないのだろう。これから大田市の小学校、中学校全てが不登校特例校であってほしいと思っている。ただ、そのような子どもに対応するために、教育課程を編成するとか、児童・生徒に対応するのは大変なので、特例校には指定するが、そういう学校には教職員を手厚く増やすとか、または、今ある適応指導教室をうまく使いながら市内全ての学校を特例校にするような統合や再編成をすると、大田市は子どもたちにとても手厚くいろんなことをやるという考えを持っている姿になると思う。 この説明だけでは、不登校特例校がどこかの学校にできるというような間違った話にとらえられてしまいそうな気がする。
委員	先程の議論に戻るが、イメージははっきりしておらず、議論をまとまることができていない。教育長から発言のあった、１０年先、２０年先を見通す力というのは、私たちにもあるのかと思う。学習指導要領もどんどん変わってきている。学校教育課程で一番必要なものを見つけたと思っていても、どんどん変わっている。そういう中で、子ども

	たちにどういう力をつけるかということになると、学ばせるというよりも、子どもが学ぶ力をつけるということに尽きるのではないかと思う。 人生１００年時代になってくると、学ぶというのは学校生活だけではない。どんどん変わっていくので、学校には行っていなくとも、学んでいかないと生きていけない、力をつけて切り開いていけない。学び続けるためには学ぶ力をつけてやらないといけない。私はこれが学校教育のずっと変わらない目的ではないかと思う。 学ぶ力を培うためにこれでなくてはならないということはないので、多様な学びの場ということを設けてやること、それは特色でも良い。そこでＡはこのような入口から学ぶ力をつけてやろう、Ｂは別の切り口の入口からスタートして学ぶ力をつけてやろう、とふうにしていくと、それぞれＡＢＣＤとかあったらこういう形で学ぶ力をつけてやると、Ａはこういう学校と見える化できる。 それがないと、学習指導要領はどんどん変わる中で、学ぶということだけで終わってしまってはいけない。学ぶ力をどうつけるかということが、人生１００年時代を生きる子どもたちにとって大事なのではないかと思う。
教育長	先程の発言は、この資料の中で訴えていることの大事なところだと思う。結局子ども自身が自分をどう作っていくか、自分の幸せをどうつかみ取っていくか、それはその子に合った学び方があると思う。そういうところを画一的に考えてカリキュラムを作ってきた日本の教育に今大きな問題が起きているのは、子どもたちが『これではやっていけない』ということを訴えているのだと思っている。 そのため、大田市の学校再編はある程度集約しながら、その中に現在の教育課題を解決していけるような、多様な子どもたちの学びの場をたくさん作っていきたい。それがこの間からお示ししている、統合後の学校の特色を記載した一覧表にある。その文言は不十分であったが、こういうことが考えられるのではないかという資料を提案しているつもりである。 基本的なところは、それぞれの子どもが自分に合った学びの場を選択できるような学びの場を大田市にたくさん作っていきたい。しかもその子どもたちにとって限られた時間であるので、出来ればスピーディーに一校でも二校でも作っていきたいと思っている。 また、ここに挙げた資料について言えば、このような多様化学校も選択肢として作っていく必要があるという意味でここに挙げさせていただいた。

（３）第三中学校について（説明：縄課長）

意見交換に係る質疑応答

発言者	内容
委員	この大森地区というのは、外部から見ても非常にユニークな取り組みをされている特徴のある地区という意見も聞く。こういう特徴のある地域というのは、案外小学校同士の統合や、中学校同士の統合よりは、小中一貫として特色のある学校にするというような考えはないのか。 先程の発言にあった学びの入口をどのようにするかということに関して、教育として今までの実績があるところでは、地域一体型として小・中学校が一体となるとある程度の規模になり、学びもいろんな形で変えることができる。逆にここは、他から『ここで学びたい』というふうに感じて来てくれるような環境もあるのかなとは思う。
縄課長	大森には、昨年度から勉強会も含めて何回も出向かせていただいている。特色ある教育、また世界遺産を活用した教育がなされていることも重々承知をした上で、どういう学校づくりを進めていくのか。例えば、その地域のいいところを使いながらどういう教育ができるのか、どういう学びができるのか、ということも含めて皆さんとお話をさせ

	ていただいている。例えば第三中学校・高山小学校・大森小学校での小中一貫校を作っていくというのも、議論にあってもいいのではないかということであれば、それも一つの選択肢だろうと思っている。 　こうした状況というのは、大森地区だけではなくて大田市にも何ヶ所か出来る可能性はあると思っているので、そうしたところを委員の皆様や、或いは今後我々もさらに地域に出かけていこうと思っているので、そうしたところで協議させていただけると良いと思う。
委員	大田市の新庁舎の整備を考えるときに、従来ある古民家など地域のものも利用していろんなサービスができないかという話もあるが、実際大森の町並みで島根県立大学や他の機関が関わって様々なことをされている。例えば、新たに大きな建物ではなく、従来ある住宅を改修したものもうまく活用すれば、規模がそこまで大きくなければ、二階建てやＲＣ建ではない地域の財産を使う考えもできるのではないか。 　大田というのはちょうどいい大きさだと思う。他の地区とは違って、多様な学びが実現できるちょうどいい大きさである。そのため、従来通り我々が学んできた教育環境をそのまま将来に落とし込むのではなく、こういった人数の中で活きた教育をするような環境や、地域の財産をうまく活用してやっていくようなアイディアを考えることが、大田の中でできるのではないかと思う。
武田教育長	大森はメディアを通じて子育てや教育がかなり配信されているので、町並みを利用した学校はできないかと思っている。また、一方で大田小学校のあり方にも関係するが、今までの学校という概念を壊して、大きなまちなかには大人も子どももみんなが集えるコミュニティを作り、その中に学校があるという発想で、学校というものを考えてみてはどうだろう。先程の伝建地区の町並みを使った学校、例えばストリートスクールのようなものができないかという考えももっている。また、三瓶の自然の中で、今ある教育施設を使って学びの多様化の受け皿のような体験的な学校はできないのかとも思う。 　それらも含めて、そういうアイディアが大田の子どもをどう育てていくか、どのような子どもにしていくかというところに紐づけできれば、多分皆さんにもその良さなり、私達の思っているものが理解していただけるのかと今回の会議を通じて思ったところである。
委員	そのあたりがリンク付けされるとよりわかりやすく、多様な学ぶ入口があるということになる。すると校区の制度を大きく変えて、ある程度希望する学校を選べるというようなストーリーもできると思う。
委員	先日北三瓶小・中学校に山村留学で来ている子どもたちと話をした。とても楽しいと言っていた。今日の資料の中に、北三瓶小・中学校は児童１３名、生徒１１名と記載があるが、その中に今年度山村留学で来ている児童・生徒は何人いるのか。
武田教育長	山村留学生は７名。しかも小学５年生と中学２年生のみで、学年が偏っている。
委員	三瓶周辺で学校を一つにするときに、山村留学のことについては今までと同じように考えるのか、そのあたりを聞きたい。
森部長	山村留学は今年度７名だが、北三瓶小・中学校にとってはその７名がすごく影響がある数である。ただ、山口町や三瓶町多根などの北三瓶地域は絶対数が少なくなる中で、山村留学に頼った学校運営をしていくべきかどうかというのは議論が必要だと思う。この学校再編の議論とともに、山村留学はどうあるべきなのかというのも並行して検討していかなければいけない。
委員長	小中一貫に関わることが素案の中にも出てくる。様々な形態があると思うがいかがか。
委員	素案の中でも三瓶エリアは、北三瓶小・中学校と志学小・中学校の統合か、それぞれ

	大田小学校と第一中学校へ統合される流れと認識をしているが、三瓶エリアについては、大森・温泉津と並んで大田の観光スポットの一つであると位置づけられている。 　現在国立公園の新たな活用や、農業振興、Ｉターンでの移住など、大田の一つの顔として重要な地域であると思っている。山村留学も含めたポテンシャルがあると思うが、学校という拠点が三瓶エリアから全てなくなってしまうのはどうなのか。資料４の素案③の中ではそれぞれ第一中学校と大田小学校の校区に三瓶エリアがあるので、それを活用した特色ある体験学習を組み込むとなっているが、それをある種の特色を生かした学校としていくのは相当難儀なことではないかと考える。それは大きなビジョンがないと難しい話だと思っている。 　実際には児童・生徒の数のこともあるので、どういった方向になるかわからないが、大田の産業振興などといった観点からすると、非常にポテンシャルある地域であり、大森のような形になる可能性もあるのではないかと思う。
森部長	おっしゃる通り、三瓶エリアというのは大田市のシンボルでもある。大森・温泉津と並行して大田市を代表する場所だと思っているし、そこから学校を失うことを想像するときに、それでいいのかという意見が出ることは当然あると思う。 　また、様々なことを総合的に判断していくことがすごく必要で、それは我々にも求められていると思っている。先々はひょっとしたら子どもが一人、二人となる地域に学校を残していくことが本当にいいことなのか。様々なことを描いて、どうぞこの学校に来てくださいというのは机上で我々ではできる。ただ、本当に現実的に描いたようになっていくかということに対して、皆さんとの議論が必要だというのは常々思っており、そういうことを皆さんで考えていくためにこの検討委員会はあるのだと思っている。 　出生数２２５人がこの先も続くと仮定して現行の計画があった。それが、我々がこの計画を見直すと言ったときの出生数は１７５人。その２２５人から１７５人の減少、５０人の減少である。２２５人のときと同じ考えのもとで学校生活ができるのかという立ち位置である。一学年２２５人で学校数を割れば、平均１０人程度になると思うが、それが１７５人になれば、一つの学校に５人～６人になる。そして、申し上げた１５０人になればもっと減っていく。これは少し議論が必要だと思うが、１５０人で２２５人と同じような形で力をつけさせるということは難しいだろうという判断のもと、ここにあると思っている。 　そのため、まずは学習指導要領や教育基本法にある学力の三要素について、２２５人のときと同じように力をつけさせるにはどうしたらいいのかというのが我々の一番の立ち位置であった。その上に立って、時代が変わっていくので、子どもが減っていくからという安易な考え方ではなくて、新しい技術や考え方でそれを補っていく必要があるのではないかというのが今日の意見もあった。我々も非常に難しいと思っている。 　そうした中で、子どもの数だけではなくて、学校施設が老朽化してきている。建て替えるにあたって、どういう規模がいいのかというのも考えないといけない。あわせて、教職員の配置が十分にできていないので、配置を十分にしていくためには、一定程度規模を集約していく必要があると考えた。 　議論の中で、今までにない様々な視点が出てきていて、それを否定するわけでもなく、皆さんと一緒に考えていきたいと思う。ただ、本当に申し訳ないが、我々も限りある人材の中で資料を作っている。どうしても粗があったり、思いが行き届かないところもあろうかと思う。ここのところを無責任ではないかと思われるかもしれないが、一緒に考えていきたい。様々なアイディアがあると思う。 　先程の大森町の話も、こういう考え方もあるのではないかということは我々も話はし

	ている。ただ、それを出した瞬間に、そんなことができるのかという反対の議論も出てくるなどジレンマもありながら今日を迎えている。いただいた意見を事務局内でも話し合いながら、また新たな次の場面で検討を深めていければと思う。
委員	小中一貫校の勤務経験がなく、大田市はまだ小中一貫校もないので、一般的に聞きかじったようなことで大変申し訳ないが発言する。先日校長会研究大会で小中一貫校の校長先生の発表があり、一番言われるのは９年間を見通した教育課程であるため、小学校から中学校の連携、特にふるさと教育などの地域を題材にした教育が根付きやすいということを聞いた。また、小学校から中学校に上がるときにどうしてもギャップを感じる子どもがいる中で、そういったことを感じにくいといった話は聞く。 デメリットは勤めていないのでわからないが、小学校から中学校に上がるときに、大田市内の学校はいずれも、子どもたちのより良い適応に向けて、連携して情報共有している。小学校から中学校に上がるときに、確かに小中一貫校はそういった情報が共有しやすいというメリットはあると思うが、ただ小中一貫校でなくても、そこはみんな十分に頑張っているということをお伝えさせていただきたい。
委員	これは直接学校再編に関係ないが、お伝えさせてほしい。２月１８日に行われるおおだ教育フェスタにおいて、高校の生徒１名が発表を行う。彼は県外出身であり、山村留学で大田にやってきて、その後も市内高校にしまね留学ということで３年間生活し、進路も地域の協力隊やコーディネーターといった仕事も考えているという生徒がいる。大田市外から大田に来て、大田で長い期間学んだ子がどのような考え方を持っていて、どのような子どもが育つのかということを一つの事例として聞いていただきたい。
委員長	それでは事務局の方で本日出た様々な意見や宿題について整理して、次回に向けてご準備いただきたい。意見交換はこれで終了させていただく。

６．その他（説明：縄課長）

●次回開催予定日の確認

日時：２月２６日（月）

場所：大田市民会館中ホール

７．閉会

●教育長挨拶

今日は改めてビジョンやストーリーといった、大田のこれからの教育をどういうふうに考えていくかというところに視点を当てて、様々なご意見がいただけたと思っている。これまでの意見を参考にさせていただき、事務局でこの検討委員会自体の進め方の方向性を少し協議しなければいけないのではないかと思ったので、次回はその提案をさせていただきたい。

以上をもって、第４回検討委員会を終了した。